

## インド仏跡巡拝の報告

2月16日は私の誕生日で、今年60歳になりました。いわゆる還暦です。その還暦を目前にして、何か記念になることをしたいと思いました。こうなると、やはり仏跡巡拝しかありません。インドにはそれまでにも二回訪れていますが、10年前に初めて訪ねた時には、運転手との意思疎通不足により霊鷲山に上ることができませんでしたので、いつかきつと霊鷲山に、との思いがずっとありました。

そんなわけで、2月14日から22日にわたって、インド仏跡巡拝にでかけました。下痢もせず無事帰国できました。以下、その様子をご報告いたします。

ルートは、ニューデリー／パトナ／ヴァイシャリー／ラージギル／ナーランダ／ブダガヤ／コルカタ、です。団体旅行への参加ではなく、個人で回りましたので、多少の不便はありましたが、ほぼ予定通りに回ることができました。出発の時点で、カシミールでの自爆テロがあり、その影響で一部の地域が封鎖されるとの噂がありましたが、結果としてはだいじょうぶでした。

しかしこの自爆テロに対するインド人の反発はすさまじく、しばしば「パキスタン人を殺せ」と叫ぶデモに遭遇しました。「すべてのものは暴力に怯える。我が身にひきくらべて殺してはならない」と釈尊が教えられたこの地において、暴力の連鎖が止まらないことに悲しみを覚えます。この現実の中で、どんなに微力であっても暴力反対の声をあげることが仏教徒の責任だと強く感じます。

ニューデリーでは、国立博物館で仏舍利（釈尊の御真骨。右下写真）を拝見しました（10年前にも拝見しましたが、その時は仏舍利を納めた防弾ガラスケースの前に多くのお賽銭が置かれていましたが、今回「お金を置かないで下さい」との張り紙あり。次々にやってくる見学者の中でも、その前にぬかづいたり、あるいは右繞しつつ参拝する外国人仏教徒の姿は相変わらずです。）この仏舍利はフランス人のペップがネパール国境近くのピプラーワーで発掘したもので、考古学的に証明された唯一の御真骨であり、その一部がタイ王室に贈られ、さらにタイ王室から日泰友好の証として日本に贈られました。それを奉納したのが名古屋の日泰寺です。

ニューデリーからパトナへは夜行列車で移動。パトナから主要仏跡間を結ぶ列車の便がないので、二日間車をチャーターしました。早朝5時（私の還暦誕生日でした）に車でヴァイシャリーに向います。ここは、かつての



ヴァッジ国の首都で釈尊が何度も訪問し、後に第二回經典編集會議が行われた地です。アショカ王の石柱（右写真）がそのままに、また仏舍利を奉納した仏塔跡が見られます。次にパトナに戻ります。現在のビハール州の州都ですが、遺跡としてはめぼしいものはありませんが、博物館ではヴァイシャリーから出土した釈尊の遺灰が特別展示室に保管されて



いて、特別料金を払って拝観しました。そしてラージギルに向かい、そこで宿泊。ラージギルは漢訳仏典では「王舎城」とあり、釈尊在世時は、インド十六大国のうちでもコーサラ国と並んで最強であったマガダ国（後に全インドを統一してマウリヤ朝帝国）の首都でした（後にパトナへ遷都）。竹林精舎としてここには大きな僧院があり、コーサラ国の祇園精舎とならんで、原始教団の二大拠点をしていました。現在は公園として整備されており、瞑想センターもその中にあります。

翌朝、日の出前に霊鷲山（耆闍崛山）に登って、ご来光を拝しました。ここは釈尊がその山頂で無量寿経・観無量寿経・法華経などの主要經典を説いたとされる場所で、ひっきりなしに多くの仏教徒がやってきます。日の出頃には狭い山頂に100人を超える参拝者であふれかえりました。日本曹洞宗の僧侶のグループ



も。なお、霊鷲山（グリッド・ラクータ）の名は、頂上にある岩が鷲の形（右上写真）をしていることによるそうです。その後、ビンビサーラ王の牢獄跡や、釈尊の侍医・ジーヴァカの診療所跡を見学しました。

ラージギルを後にして、次に向ったのはナーランダです。この地のナーランダ大学は427年に設立された世界最古の大学であり、世界遺産にも指定されています。大学、といっても仏教大学です。最盛期には1万人以上の学生と1500人の教師が共同生活しながら講義がなされていました。かの玄奘三蔵法師もここに留学していました。1193年に、イスラム勢力の侵攻により破壊されてしまいましたが、その堂々たる威容は、広大な遺跡から想像することができます。

ナーランダの次には、今回の旅の最大の目的地ブッダガヤです。ここは釈尊成道の地として、世界中から多くの仏教徒が集結し、世界遺産である大菩提寺を中心として、その周辺に日本、中国、スリランカ、タイ、チベット、ミャンマー、ベトナム、バングラデシュなど各国の寺院がそれぞれの様式で薨を競っています。「お寺のテーマパーク」とも評されます。ここには2泊3日滞在しました。10年前と比べると、街の交通量、店、人口が増えており、騒がしくなっていました。また2013年のテロ事件のためにセキュリティチェックが厳しくなったことはしかたないことです。しかしながら、大菩提寺境内では、100人を超える韓国人の浄土系新興宗教団体が一角を陣取り、境内をぐるりと「佛」と染め抜いた幟で囲い、大音量のスピーカーでのべつまくなしに読経していたのには閉口しました。読経だけならともかく、アリランまで歌っていたのには、あきれはてます。大菩提寺には各国・各宗派の仏教徒が、それぞれの方法で読経したり、祈ったり、瞑想したり、さまざまに宗教行為をしています。そしてお互いに邪魔にならぬように配慮しているわけです。彼らはそれを踏みにじっています。

本来なら、「スピーカーは禁止」「幟は禁止」であってしかるべきなのですが、ここを管理している委員会は実質上ヒンズー教徒によって牛耳られていて、仏教徒の意見が通りにくくなっています。この件については、別の機会に書いてみたいと思いますが、いずれにせよ、多くの仏教徒はこの現状を嘆いていると思います。

ブッダガヤからはまた夜行列車でコルカタまで移動しました（列車は4時間遅れ。このくらいはインドでは普通のことですが、さすがに深夜3時までプラットホームで待ち続けるのは辛かったです）。ほとんど一睡もできずにコルカタに到着。聞きしに勝る交通渋滞、喧噪、空気汚染ですが、街のあちこちに残るイギリス植民地時代の建築物で、どことなく欧州の風を感じさせます。コルカタは仏跡ではありませんが、ここにあるインド博物館はアジア最大級とのこと、全部をくまなく見て回ると二日間かかるとガイドブックにあります。もちろん仏教美術、



とくに彫像のコレクションが豊富です。圧巻は仏塔を囲むバールフットの欄楯浮彫（左下写真）ですが、それ以外にもガンダーラ仏の一群は見事でした。展示を順にのって行くと、様式が複雑化するとともに仏教自体が密教化していく有様が見て取れます。

(山口眞一)